

別事 特別記 カウフマンがウィーン・プログラムを歌つ ——コンサートツアー「僕のウィーン」ミュンヘン公演から

取材・文 中東生
Text: Shinobu Neika

ミュンヘンの会場がウィーンに

「ウィーンのコンツェルトハウスに比べて音響が悪い」と案じる主催者の心配をよそに、タキシードに身を包み、リラックとした様子のカウフマンは、自然体なトークも交え、2500席以上のガスタイクを埋める満員の聴衆をウィーンへ「ワープ」させた。

前半はヨハン・シュトラウス2世の作品が並んだ。レコーディングではアダム・フィツシャー指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と録音したのだが、ツアーの同行オーケストラ、ブラハ・フィルハーモニアは冒頭の「ヴェネツィアの一夜」序曲の「ワルツ部分が重く、先行きが不安だった。しかし中間部では柔らかく、美しい音色を聴かせて安心させた。

カウフマンは、自身も認めるように、リラックスして臨めるこのプログラムでは始終楽しそうで、ビゼー「カルメン」のドン・ホセなどを歌うときに、使いすぎた印象を与える頭声が、オペレッタには正統な歌唱と甘さを両立させる効果を与えている。

《こうもり》のアイゼンシュタイン侯爵

ソニー・クラシカルから昨年発売されたカウフマンの新譜「ウィーン」オペレッタのアリアと愛唱歌集は、ドイツ語圏のクラシック・チャートで、この原稿を書いている現在、第2位を保持している。収録曲を抱え、そのタイトル通り、10月14日にウィーンでスタートしたコンサートツアー「僕のウィーン」、第2回目は1月7日、彼の故郷ミュンヘンがドイツで初披露の場所選ばれた。

Jonas Kaufmann sang Vienna programme in Munich

はバリトンが歌うことが多く、「パリの」と称されるカウフマンの声にはピツタリのはずなのだが、ドレスデンのゼンパーオーパーで役デビューしたときも、重く歌う傾向があった。今回のへ時計の二重唱でも出だしは重すぎたが、どんだん役に入っていくと彼の魅力が光り、楽しく演じているのがほほえましい。相手役はおなじみのレイチェル・ウイリス・ソレンセンで、昔からカウフマンのファンだったというが、そんなスター歌手に気後れすることもなく、意気の合ったようすを見せた。しかしロザリन्दのアリアではオーケストラとタクトがピタッと合わず、不気味な燃焼に終わった。

続いてカウフマンは「語り」のような《踊り子ファニー・エルスラー》のワルツを経て、前半最後の《ウィーン気質》では、ようやく理想的なワルツの感覚を得たオーケストラと高水準の二重唱で満足感を与えた。

重いオペラとは
まるで違う表情も

休憩後のオーケストラは、ロバート・シュトルツ《ウィーンのカフェ》で、中間部の柔らかな部分を美しく仕上げた。



指揮のヨッヘン・リーダー(右)とカウフマン ©Marcello Curto



カウフマン(左)とウイリス・ソレンセン(右)

その後シュトルツに戻り、歌曲を3曲歌い上げた。シャンソンふうの声の扱いが光っていた。オーストリア人の母親を持つ知人は、「子供のころによく歌った曲が並んでいて、郷愁を誘った」と感激していたほどだ。最後にジーツィンスキーの《わが夢の都ウィーン》をウィーン訛りで歌い通した。指揮のヨハン・リーダーはメイン・テーマの部分で、オーケストラをもっと甘く歌わせてられたのではないか。

た。スーツ姿に着替えたカウフマンは、エメリッヒ・カルマン《サーカスの女王》のアリアで少々がんばりすぎ、最高音が少しうわずったが、聴衆を興奮の渦に巻き込んだ。後半の目玉曲目であるレハール《メリー・ウイドウ》では、ウイリス・ソレンセンの歌うハンナのアリアも映え、二重唱《唇は語らずとも》では、カウフマンの息の長いレガートが冒頭から美しく流れた。

終演後は舞台裏で乾杯があった。世界的テノールがビール瓶を片手にファンや友人たちと語り合う姿は、そのままオペレッタの世界のようで、重いオペラのレパートリーを歌っているときの彼とは、まるで違う表情なのが印象的だった。カウフマンを初めて聴いてから19年が経つが、50歳になった彼にとってこのプログラムは、残りの歌手人生を再考させる分岐点になるのではないだろうか。